

No.41 隠された言葉

今回は、「隠された言葉」についての情報提供をします。

ダイアログだけではなく、人と話をする時に、意図せず言葉が隠されたままの状態でのコミュニケーションが進んでしまいます。けれども、それをきちんと受けとることができたら、ダイアログがより行いやすくなるのです。

ダイアログを日常に取り入れて、自分という人生を歩みたい人が足を踏み出せる、この資料がそんなきっかけになれば嬉しいです。

日本語を使う私たちには、日常のコミュニケーションにおいて、言葉の中で隠されている表現がたくさんあります。わかりやすいのが主語であり、他にもたくさんの言葉が隠れているままだでもコミュニケーションをとれるという、そんな言語を扱っています。

先に挙げた主語とは、「誰が」「なにが」という主体を表し、主体とは何か動作をしたときにその動作をした本人のことを言います。または何かがある状態にあるかをいうときは、その何かのことを指します。例えば、私、あなた、彼(彼女)、それ、などが主語に当たります。

その主語がつい隠れてしまうのが日本語で、でも隠れたままだでもコミュニケーションをとるうえで問題がないので、日常的にそのまま扱われていくし、むしろ阿吽の呼吸という言葉を超えたコミュニケーションを可能とする遺伝子を持っているので、無意識に表現をシンプルにしようとしていくのかもしれませんが。

本で「伝え方が9割」という表現が広がり、他のコミュニケーションの学びの場では「相手に伝わった分だけがコミュニケーション」という風に今は言われていますが、もとを返せば結局、それができるのは「受けとり力」のある人で、人がどう受けとったのか、自

分がどう感じたのかを表現できることが重要なので、結局は「受けとり力」だと私は思っています。

なので、今回は相手の発言の中に隠されている言葉を受けとることに焦点を置いて話をしていきますが、それができるようになれば伝え方も変わってくるのでしょうし、私はまだ未開の領域ですが、阿吽の呼吸などにも近づけるのだと思います。

ダイアログの場には主体性は必要不可欠で、ダイアログの目的である探求や発見は、自分自身においての探求・発見であって、他人に強制するものではありません。主体性を重んじるのであれば、「No.5 ダイアログのポイント「主語」」でも話した通り、主語を私にすること、それがシンプルで導入しやすいものなのです。それによって、誰かのためのダイアログではなく、自分にとってのダイアログになりやすいので。

今回の隠された言葉を受けとるにも、まず最初は主語が何なのかをはっきりさせること、それをする中で、相手の発言をより正確に受けとることができます。ダイアログをしていく中で主語がない言葉が生まれた時に、自分で主語を見出していくのです。

ちなみに、発言のメインとなる「主語」「述語」「修飾語」「接続語」「独立語」のなかで、「主語」と「述語」を見つけだすには、まず文章の中の「述語」を見つけ出し、「主語」と「述語」の間を「～が」としてもおかしくないか確認します。

例) 犬も走る 私まで笑った 山に登る 本をよく読む

これらを実際に「～が」に変えてみると、

変更後) 犬が走る 私が笑った 山に登る 本がよく読む

といったカタチで、おかしくないもの、おかしいものになります。上記の4つの例では、左からひとつ目は「犬」が主語であり、ふたつ目は「私」が主語になります。そして3つ目と4つ目には主語は隠れているのです。

国語の復習のような話になってしまいましたが、とにかく主語が隠れているのかどうか、もしわかりにくい場合はこのように探してみてください。

それでもわからないときは相手に訊く、それが1番です。尋問のように訊けば嫌がられることも多いでしょうが、訊かれることは意外にうれしいもので、「この人はきちんと私の話を聴こうとしてくれている。」という風に受けとられることもしばしば。

逆に、わからないまま曖昧にしてその場を進めると、日常に関わる重要な話になればなるほど、思わぬ落とし穴に陥ることになりかねません。なぜならば、誰が何をどうやってやるのか、それですら共有できていない会議もたくさんあるので。

それに付け加えて、ダイアログにおいてはもう少し隠されている言葉に目を向ける必要があります。

例えば、「あなたがやるべきだ」という表現に隠れている言葉があります。

それは、

「あなたがやるべきだ、と私は思っています。」

という風に、話している本人が主語となって、「あなたがやるべきだ」と相手に伝えているので。

この例でいうと、あくまで私が思ったことを話ただけであって、実際にやるかやらないかはあなた次第、といったカタチで、自分のメッセージを相手に発しているだけなのです。

自分ごとの場なのか、他人ごとの場なのかでいうと、自分ごととして関わるのがダイアログであり、自分以外を主語にした言葉では他を決めつける表現でしかないのですが、それであっても最後に「私」を主語にした言葉が隠れていることになります。

この表現は結局、「私」の発言はあくまで「私」の思ったことや考えたことです。なのでこういう表現になると、どんなに断言しても相手を決めつけてないことがわかります。つまり、私たちはいつも憶測や仮説を相手に伝えているのであり、「あなたがやるべきだ、と私は決めつけました。」と思いながら話している人はそうそういないと思います。

でも、もしかしたら私がそれ以外の状況に出くわしてないかもしれないので、その確認もふまえて自分で練習してもらえるとうれしいです。これが習慣付けばダイアログをする時に、自分と相手の意見を分離しやすくなるので。

やり方としては単純で、自分が発言したこと、もしくは頭に浮かんだ言葉に、隠れた主語や述語などを付け足していきます。ふと浮かんだ言葉が最終的にどんな表現になるのか、慣れてくると別にわざわざ言葉を増やさなくても、必要な時に自分や相手の発言から隠れている言葉を受けとれるようになりますので。

先ほども例に出しましたが、ダイアログをしている中で、日本語での発言の最後に隠れている可能性が高いのは「私は思う」です。英語などの順番であれば、「私は思う」という言葉を最初に持つてくるのでわかりやすいです。でも、私たちは日本語でダイアログを行うので、それをきちんと意識しながら相手とダイアログすることで、見えてくるもの、受けとれるものなど、全然違う感覚になるはずですよ。

もしかしたら、最初に意識しすぎるとモヤモヤした気持ちになるかもしれません。そのモヤモヤした気持ちの先には必ず、あなたがつくり出したカタチが待っているのです。知っているだけには終わらせず、ご自分の体験としてカタチにしてみてください。

せつかくの知識は、自分の毎日をより良くするものです。同じ言葉でも自分の言葉として語れた時に、全然違うメッセージ、それこそ隠された想いが相手に伝わっていくのですね。

今回は「No.41 隠された言葉」のお話をしました。次回は「No.42」の話をします。

「ダイアログの場には勝とうとする人はいません。」この言葉がダイアログのすべてなのかもしれません。目的が探求や発見することであるだけで、あとは勝ち負けも、正解不正解もない、そんな特殊なやりとりです。

あなたがうまくいったなと思うことでも、うまくいかなかったってことでも、あなたが実際にダイアログしてみた話をぜひ私に教えてください。それがまた私たちの探求や発見につながっていきますので。

ダイアログの教科書 No.41 隠された言葉

投稿日 2015/06/10・最終更新日 2015/06/10

発行 COBAKEN LIFESTYLE LABO <http://cobaken.net>